
土地分類基本調査

大河原・鮎沢

5万分の1

国 土 調 査

山 梨 県

1 9 9 3

序 文

本県では、昭和55年度の「富士山」図幅をはじめとし、以来22図幅の土地分類基本調査を行ってまいりました。

リニア実験線の建設及びリゾート開発等により、本県の土地利用は将来大きく変わるものと予想され、郷土の発展と自然環境を守るため乱開発を抑止し、県土の有効利用を図ることは一層重要となっております。このような状況の中で県民の生活文化等均衡のとれた秩序ある開発と保全を図るためこの調査を実施いたしました。

この冊子は、「大河原」「鯉沢」図幅（国土地理院発行5万分の1地形図）のうち山梨県の行政区域について、地形分類、表層地質、土壌、傾斜区分、水系・谷密度、土地利用現況を収録しております。

また、成果の印刷についてはコンピューター・マッピング方式を採用しております。

本調査の結果が、各種土地利用行政や土地開発事業の基礎資料として広く利活用されることを希望いたします。

おわりに、本調査に御協力を頂いた関係各位に深く感謝いたします。

平成 5 年 3 月

山 梨 県 農 務 部 長

石 村 洋

目 次

序 文 ま え が き

総 論

- I 位置，行政区画および面積…………… 1
- II 人口および世帯数…………… 4
- III 地域の特徴…………… 6
- IV 主要産業の概要……………12

各 論

- I 地形分類図……………17
- II 表層地質図……………28
- III 土 壌 図……………33
- IV 傾斜区分図……………37
- V 水系・谷密度図……………38
- VI 土地利用現況図……………39

資 料

- コンピューター・マッピングについて……………40
- 土地分類基本調査における面積測定について……………41

ま え が き

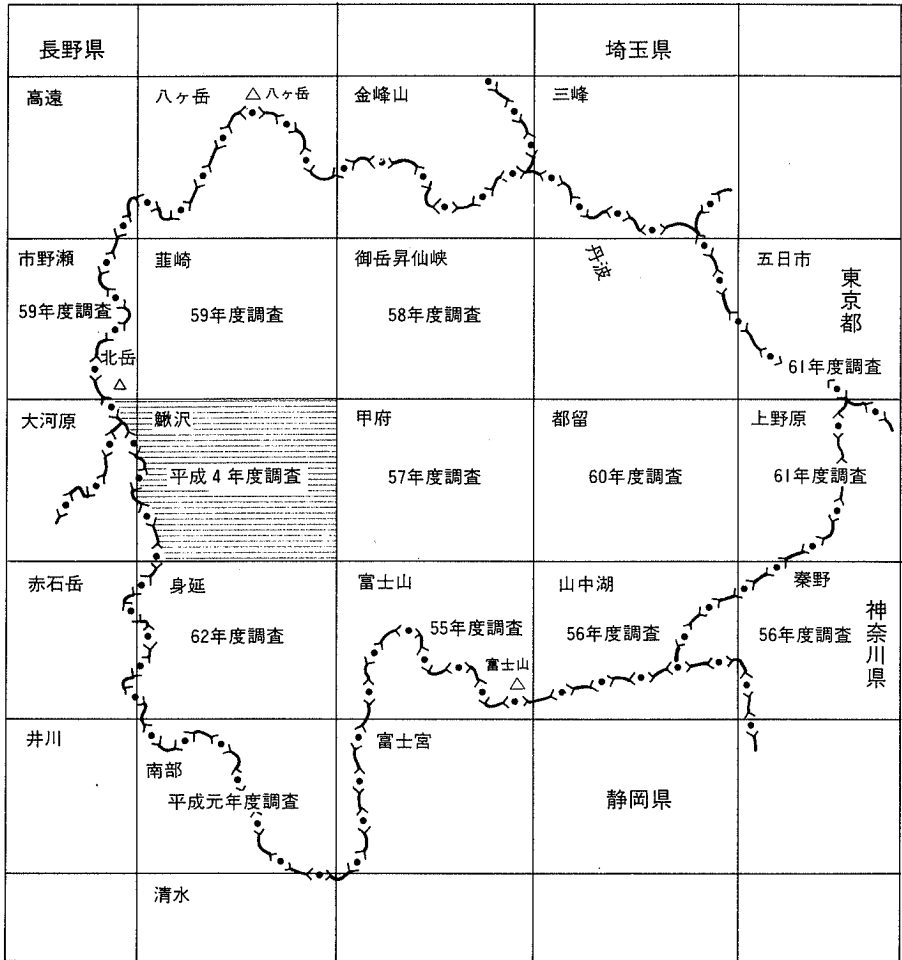
1. 本調査は、国土調査法(昭和26年法律第180号)第5条第4項の規定により国土調査の指定を受け、国土庁土地局国土調査課の指導の下に、山梨県が事業主体になり実施したものである。
2. 本調査の成果は、国土調査法施行令第2条第1項第4号の3の規定による土地分類基本調査図及び土地分類基本調査簿である。
3. 調査項目、成果の作成機関及び担当者は、下記のとおりである。

調 査 項 目	作 成 機 関	担 当 者
地形分類調査 標高・傾斜区分調査 水系・谷密度調査	山梨大学教育学部 東京都立大学理学部	教 授 吉村 稔 助 教 授 平川 一臣
表層地質調査	山梨学院大学 大月短期大学 山梨大学教育学部 宝石美術専門学校 山梨学院大学	名 譽 教 授 濱野 一彦 教 授 田中 収 助 教 授 角田 謙朗 助 教 授 服部 清二 講 師 河西 秀夫
土 壤 調 査	山梨県総合農業試験場 " 山梨県林業技術センター " " "	場 長 高山 覚 研 究 員 秋山 康三 所 長 三村 治夫 主任研究員 馬場 勝馬 主任研究員 清藤 城宏 研 究 員 田中 格
土地利用現況調査	山梨県農務部農村整備課	主 事 八卷 哲也 主 事 諏訪 哲也
総 括	山梨県農務部農村整備課	課 長 清水 武秀 主 査 山田 賢一 主 事 諏訪 哲也 主 事 柳沢 章司

總

論

第1図 位置 図



I 位置，行政区画及び面積

1. 位置

「大河原・鰍沢」図幅は、山梨県の西部に位置しており、「大河原」図幅は、西側の大半に長野県及び静岡県を、「鰍沢」図幅は西側の一部に静岡県を含んでいる。

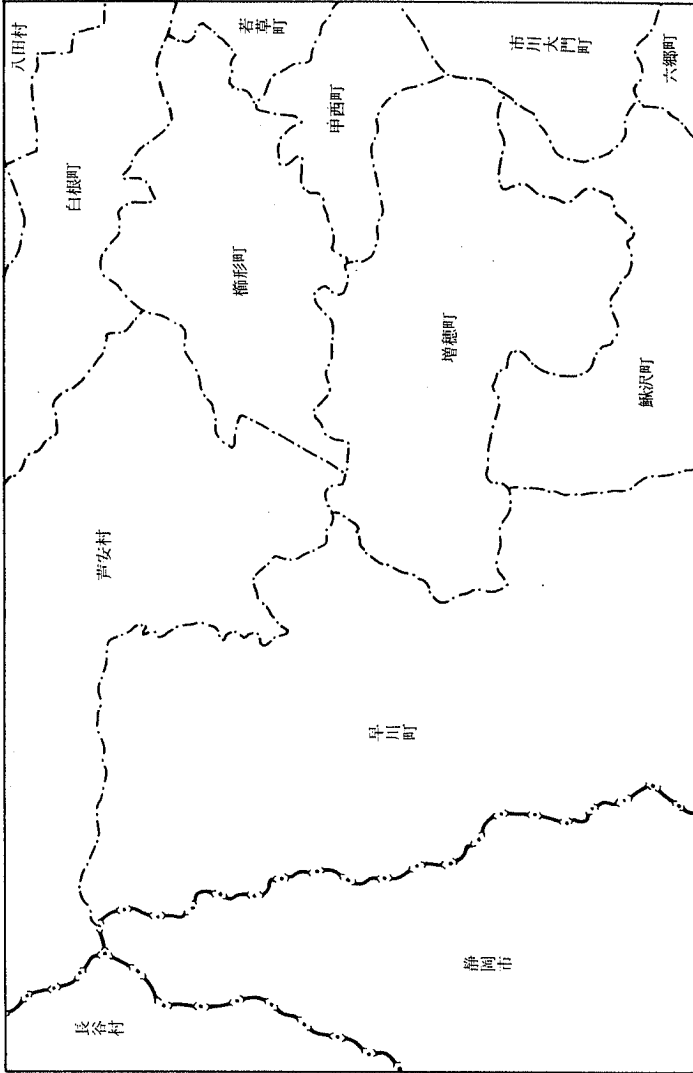
経緯度は、「大河原」図幅東経 $138^{\circ}00' \sim 138^{\circ}15'$ ，北緯 $35^{\circ}30' \sim 35^{\circ}40'$ ，「鰍沢」図幅東経 $138^{\circ}15' \sim 138^{\circ}30'$ ，北緯 $35^{\circ}30' \sim 35^{\circ}40'$ の範囲にある。

本年度の調査は「大河原・鰍沢」図幅の内，山梨県の行政区画を対象とした。

2. 行政区画

「大河原・鰍沢」図幅の行政区画は、第2図のとおりで韮崎市・市川大門町・六郷町・下部町・増穂町・鰍沢町・早川町・八田村・白根町・芦安村・岩草町・楡形町・甲西町の13市町村から成っている。

第2図 行政区画



3. 面 積

本調査対象地区内の市町村の行政区画面積及び図幅内面積は、第1表のとおりである。

第1表 面 積

市町村名	図幅内面積		市町村面積		占有率 A/B (%)
	面積(km ²) A	構成 (%)	面積(km ²) B	構成 (%)	
蕪 崎 市	1.56	0.4	143.73	13.5	1.1
市川大門町	15.84	3.7	32.72	3.1	47.9
六 郷 町	3.71	0.9	13.28	1.2	27.9
下 部 町	0.01	0.0	130.34	12.2	0.0
増 穂 町	65.17	15.4	65.16	6.1	100.0
鰻 沢 町	35.76	8.4	46.81	4.4	76.4
早 川 町	125.64	29.6	369.86	34.7	34.0
八 田 村	5.05	1.2	8.04	0.8	62.8
白 根 町	32.13	7.6	39.11	3.7	82.2
芦 安 村	75.57	17.8	147.74	13.9	51.2
若 草 町	5.56	1.3	10.28	1.0	52.1
櫛 形 町	42.56	10.0	42.57	3.9	100.0
甲 西 町	15.69	3.7	16.30	1.5	96.3
計	424.25	100.0	1,065.94	100.0	40.0

資料：建設省国土地理院「平成3年全国都道府県市町村別面積調」による。

但し、図幅内面積はコンピューター・マッピングによる面積測定の結果に基づいた数値である。

II 人口及び世帯数

1. 人口

この地域の人口分布を見ると、凶幅東側の国道52号線沿いの人口が密集している地域と、凶幅中ほどから西側の山間部に集落が散在し人口密度が極端に低くなっている地域からなっている。

人口が減少している山間部の地域では、過疎化を防ぎ若者の定住化を促進し地域の振興策として若者に魅力ある産業振興・高度福祉社会の構築・快適な居住環境の整備充実・教育環境の整備充実・交通機関の整備と高度利活用等を実施している。

甲府盆地南西側の人口の増加している地域では、近年都市化の進展等により宅地の開発・企業の進出・観光資源の開発等がみられ増加傾向が強まっている。

また、今後中部横断自動車道、甲西バイパス及びリニア中央エクスプレスのインパクトを考慮した場合、さらに増加するものと想定される。

2. 世帯数

世帯数は、一部地域で減少しているものの全体的には増加している。

昭和60年には1世帯当たり3.66人だったのが平成2年では3.55人と徐々に世帯人員が減少する方向で推移し核家族化が進行している。これは、農村地域での既存世帯からの分離及び人口増加地区での転入による増加等が考えられる。

第2表 人口および世帯数

市町村	昭和60年				平成2年				増			減	
	人口(男)	人口(女)	計(A)	世帯数	人口(男)	人口(女)	計(B)	世帯数	人口(男)	人口(女)	計(B-A)	世帯数	世帯数
	葦崎市	13,858	14,317	28,175	8,007	14,690	15,076	29,766	8,573	832	759	1,591	566
市川大門町	6,107	6,441	12,548	3,467	5,860	6,066	11,926	3,464	-247	-375	-622	-3	-3
六郷町	2,290	2,428	4,718	1,299	2,135	2,288	4,423	1,297	-155	-140	-295	-2	-2
下部町	3,575	3,841	7,416	2,265	3,171	3,467	6,638	2,158	-404	-374	-778	-107	-107
増穂町	6,560	6,813	13,373	3,615	6,461	6,681	13,142	3,723	-99	-132	-231	108	108
鯉沢町	2,520	2,763	5,283	1,551	2,398	2,630	5,028	1,581	-122	-133	-255	30	30
早川町	1,229	1,422	2,651	1,061	1,033	1,236	2,269	981	-196	-186	-382	-80	-80
八田村	2,578	2,772	5,350	1,414	3,008	3,150	6,158	1,696	430	378	808	282	282
白根町	7,765	8,009	15,774	3,943	8,377	8,779	17,156	4,385	612	770	1,382	442	442
芦安村	332	290	622	193	292	260	552	183	-40	-30	-70	-10	-10
若草町	4,068	4,169	8,237	2,235	4,536	4,687	9,223	2,497	468	518	986	262	262
柳形町	8,310	8,872	17,182	4,443	8,458	8,977	17,435	4,666	148	105	253	223	223
甲西町	5,526	5,607	11,133	2,892	5,827	6,000	11,827	3,221	301	393	694	329	329
計	64,718	67,744	132,462	36,385	66,246	69,297	135,543	38,425	1,528	1,553	3,081	2,040	2,040

Ⅲ 地 域 の 特 性

本地域は、県の西部に位置し冬季になると甲州の空っ風がふきさらし、盆地特有の底冷えのする寒さとなる。

御勅使川・滝沢川・戸川等の河川によって形成された複合扇状地と釜無川の氾濫原では水田がなく、飲料水にも事欠く地域であったが、昭和31年早川流域総合開発事業の一環として、御勅使川溪谷地下に集水管を伏せ伏流水を取水して野呂川上水道を開削したことで飲料水の問題は解決し、昭和40年から国営事業として土地改良事業が行われ水不足の問題も解決し今ではモモ、ブドウ、リンゴ、スモモ、ウメ等の果樹園化が進んでいる。この地域の果樹栽培は、他地域と比較して果樹の種類が多いのが特色である。

県立南アルプス巨摩自然公園に白根山系の間ノ岳・農鳥岳等3,000m級の南アルプス連峰が連なり、その間を糸魚川静岡構造線が走り、早川町等では断層線が観察できる。また、夜叉神峠をはさんでの野呂川溪谷と御勅使川の溪谷は、筆舌に尽くせぬ景観をみせている。この河川は、電源や農業用水、飲料水にと多方面に活かされている。

1. 気 象

調査地域は、甲府盆地の南西に位置する平坦な地域より、日本の屋根といわれる南アルプスにまでおよび、気候も複雑になっている。

甲府盆地は、夏期にすこぶる高温を示し、逆に冬は気温が著しく低く内陸盆地の特徴をみせている。

山間部の気温は、方位や標高によっても著しく異なり、山地は傾斜が急であって標高が高い。年平均気温は甲府盆地の14℃から南アルプス主稜線の2℃に及んでいる。

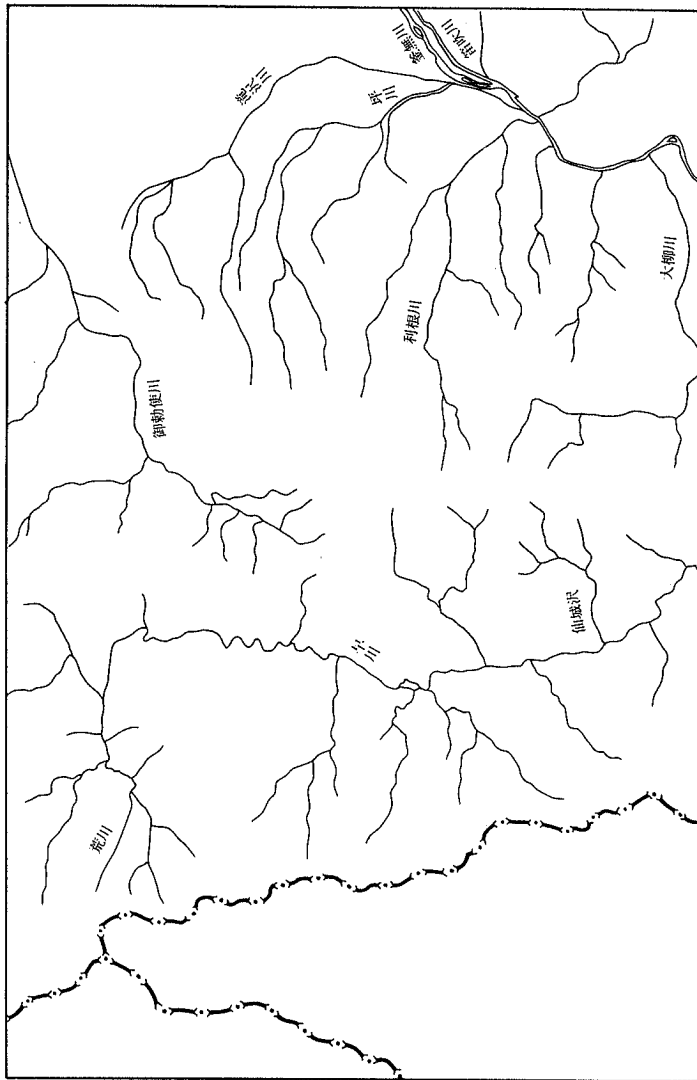
降水量をみると甲府盆地は少なく1,300mm以下であるが、幅東南部の笛吹川と釜無川とが合流する付近は雨もやや多く1,500mm内外である。早川流域は甲府盆地と異なり周囲を高い山で囲まれているためか降水量も多く2,000mmを超えている。

第3表 甲府地方気象台月平均年値表

要素	単位	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	全年
平均気温	°C	2.0	3.4	7.0	13.3	17.8	21.3	24.8	25.9	24.9	15.5	9.8	4.1	13.9
最高気温	°C	8.4	9.6	13.5	19.8	24.2	26.2	30.1	31.7	27.0	21.1	16.0	10.7	19.9
最低気温	°C	-3.5	-2.0	1.4	7.8	12.3	17.2	21.3	22.0	18.1	11.0	4.5	-1.4	9.1
降水量	mm	32.5	46.8	75.0	84.5	86.4	149.9	118.2	137.3	150.3	98.1	49.5	26.5	1,055.1
平均風速	m/s	1.9	2.1	2.2	2.1	2.0	1.7	1.6	1.7	1.4	1.4	1.4	1.5	1.8
現地気圧	mb	982.0	982.2	981.8	982.7	979.9	977.7	977.7	978.4	981.2	984.7	985.7	984.1	981.5

(統計期間1961年～1990年)

第3図 主な屋根と河川図



盆地は日照時間が多く湿度も低い。しかし、早川流域の高海拔地域では雲や霧のかかる事がおおく日照時間も少ない。

2. 就業構造

就業人口は、第1次産業の構成比が15.4%であるが、高齢化、後継者不足等により年々減少しており、その構成比も年々低下してきている。第2次第3次産業の就業者は、中部横断自動車道の影響による産業系事業所の立地や都市部における通勤圏の拡大に伴う宅地化の進展などにより増加傾向が継続的に続き、特に第2次産業の振興が予想される。

第4表 就業者数（平成2年国勢調査）

市町村	総数 (人)	第1次産業		第2次産業		第3次産業		分類不可能産業	
		実数 (人)	構成比 (%)	実数 (人)	構成比 (%)	実数 (人)	構成比 (%)	実数 (人)	構成比 (%)
韮崎市	15,562	2,872	18.5	5,906	38.0	6,758	43.4	26	0.2
市川大門町	6,175	351	5.7	3,001	48.6	2,822	45.7	1	0.0
六郷町	2,418	213	8.8	1,162	48.1	1,038	42.9	5	0.2
下部町	3,534	552	15.6	1,345	38.1	1,630	46.1	7	0.2
増穂町	7,112	748	10.5	3,190	44.9	3,167	44.5	7	0.1
鰍沢町	2,596	132	5.1	1,128	43.5	1,335	51.4	1	0.0
早川町	1,074	84	7.8	425	39.6	565	52.6	0	0.0
八田村	3,329	533	16.0	1,400	42.1	1,396	41.9	0	0.0
白根町	9,285	2,201	23.7	3,358	36.2	3,721	40.1	5	0.1
芦安村	304	3	1.0	145	47.7	156	51.3	0	0.0
若草町	4,818	762	15.8	2,114	43.9	1,941	40.3	1	0.0
櫛形町	9,306	1,565	16.8	3,657	39.3	4,082	43.9	2	0.0
甲西町	6,437	1,075	16.7	2,894	45.0	2,462	38.2	6	0.1
計	71,950	11,091	15.4	29,725	41.3	31,073	43.2	61	0.1

3. 交 通

本図幅の東側を南北に国道52号線が連絡し国道沿いに市街地が形成されているため、この国道52号線を軸として東西方向に主要地方道が連絡し、さらにこれらの国道と主要地方道を一般県道が結んでいる。しかし、各路線とも道幅が狭く、また道路網全体としては連絡が希薄な状況にあり産業の進展やマイカー時代による交通量の増加は交通災害及び交通渋滞を引き起こしており、それに伴う騒音や歩行者の安全が憂慮されている。

竜王芦安線、野呂川波高島線等は南アルプス登山者に多く利用され夏期を中心に賑わいをみせている。

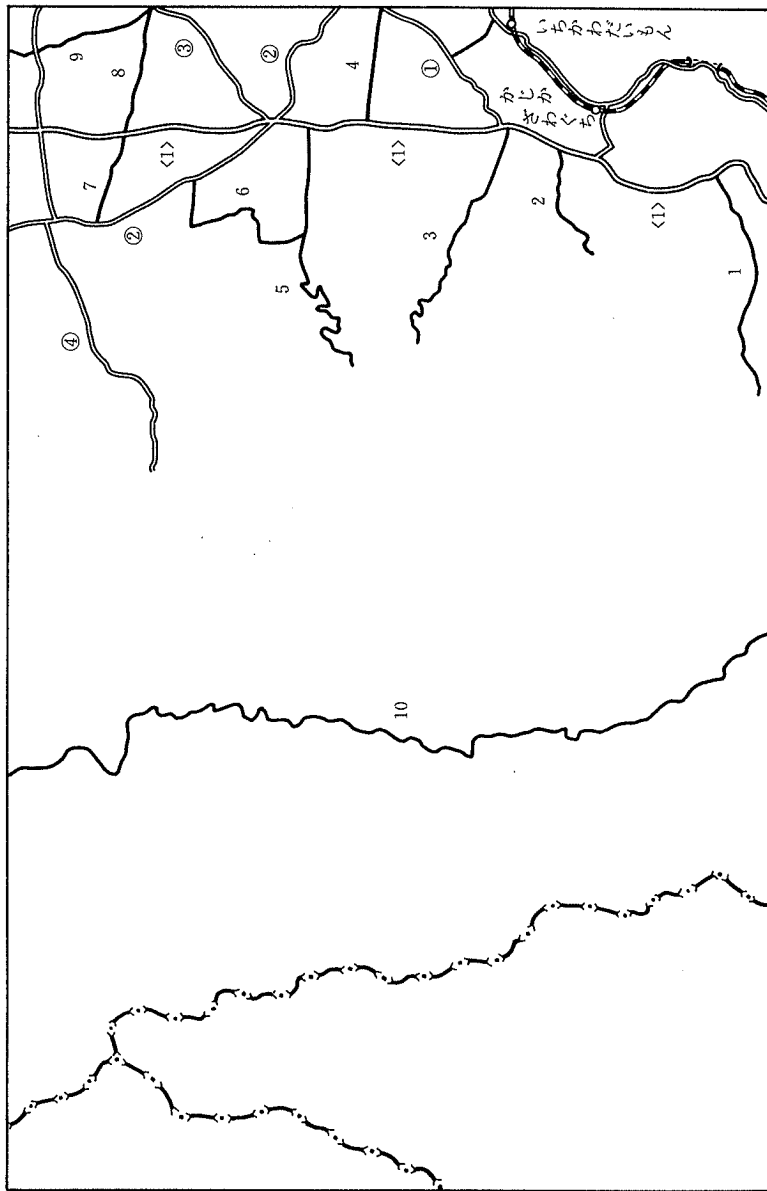
鉄道については、JR身延線が本図幅南東側にあるが、単線鉄道であるため輸送力、輸送時間において限界がありマイカーの普及に伴い利用客数は減少傾向にあり、駅の無人化、運行本数の減少等をまねいている。

一 般 国 道 <1> 52号

- 主 要 地 方 道
- ① 増穂若草線
 - ② 韭崎櫛形豊富線
 - ③ 甲府櫛形線
 - ④ 竜王芦安線

- 一 般 地 方 道
- 1 十谷鬼島線
 - 2 小室鯉沢線
 - 3 平林青柳線
 - 4 西一軒茶屋荆沢線
 - 5 伊奈が湖公園線
 - 6 桃園市之瀬線
 - 7 飯野新田白根線
 - 8 今諏訪北村線
 - 9 若草双葉線
 - 10 野呂川波高島線

第4図 交通網図



Ⅳ 主要産業の概要

1. 林業

この地域の約7割は林野で占められているが、南アルプス国立公園、県立南アルプス巨摩自然公園の指定、土砂流失防止や水源かん養の保安林としての施業管理、さらに急勾配な地形等により林業生産地としての制約が多い地域である。

この地域における林業は、豊富なクヌギ、ナラ材を利用したの椎茸栽培等が行われているが、農業との兼業タイプが多く生産規模も小規模で生産出荷体制も弱体である。しかし、地域産業に果たす役割は大きく林道の整備を促進しながら体制の組織化を進め林業経営の近代化、安定化を図り県産材の主産地形成を図るため生産から流通加工体制の組織化を進め地域の特色をいかした特用林産物を振興し林業経営の近代化、安定化を図っている。

また、規制の多い山林を有機的、多面的に活用できる方策を検討し、保健休養観光及びレクリエーション等と連携した施策を推進している。

2. 農業

本図幅西側の地域は、大正から昭和初期にかけて養蚕が発達し耕地の大部分が桑園で占められ大養蚕地帯となったが、戦後養蚕が衰微し果樹園化が急速に進み集団的な生産地となり、果樹農業を中心に展開しているものの、農地の宅地転用公共事業による転用等、都市化の進展及び後継者不足等による就業者の減少により経営面積は減少傾向をたどっている。これに伴い、粗生産額も若干の減少傾向を示している。将来さらなる都市化の進展、消費者ニーズの多様化によって産地間競争の激化が考えられ計画的な優良農地の保全に十分留意した土地利用構想を検討することが必要となってくる。また、生産体制についても生産物の高品質化や高付加価値化の推進及び労働力の確保、販売体制の強化等によって多様なニーズに対応できる特色ある農業の確立や遊休農地の高度利用が必要となり、総合的な農業振興を目指した取り組みを行っている。

本図幅西側の地域は、その大部分が山間の傾斜地で山峽の斜面で営まれており、農業従事者の高齢化、後継者不足等により遊休農地の増大と荒廃をもたらしてい

る。収益性の高い作物への転換がみられるものの大部分の農家は複合経営型の小規模経営である。

3. 工 業

工業においては、製造品出荷額が年々増加の傾向にある。その背景として甲西工業団地、地区拠点工業団地等整備による電気機械器具、理化学機械、金属製品等の企業の積極的誘致が考えられる。今後は、将来的な土地利用をにらみながら地域環境の保全や営農環境の保全と両立、地域イメージとの適合を図りつつ計画的な無公害系企業の誘致を行い雇用機会の増大、労働力の安定化を図り特色ある地域産業の振興や甲西バイパス、中部横断自動車道等の整備インパクトを生かした施策展開を計画的に図っていく。また、地域文化とともに発展してきた和紙、花火、硯、ニット等の地場産業は伝統工芸色彩の強い産業が中心をなしており、その体質は弱く労働力全体が高齢化してつあるなかで近代化を進めながら工芸技術を後生に伝え発展させるため技術後継者を育成確保している。

4. 観 光

南アルプス国立公園や県立南アルプス巨摩自然公園を有するこの地域の観光地としては、早川町や芦安村を中心に優れた景観をおりなす南アルプスの山々、楢形山、伊奈ヶ湖、奈良田温泉郷等があげられ、特に南アルプスは美しく人々の心を引き付けさまざまな渓谷、知られざる大小の滝等自然を愛する人々にはこのうえない魅力となっている。

観光形態は、日帰り客が中心となっており、県内はもとより京浜方面をはじめ広い地域から集まり観光人込客も年々増加傾向を示している。観光客の圏域内観光時間の拡大、道路整備等観光客誘導ルート整備やインフォメーション機能の充実を図るとともに休憩、宿泊施設の整備等の課題となっていることもある。

また、これらの資源は小規模なものが多く埋もれた観光資源を掘り起こしながら、それぞれの結び付きを強くし広域ネットワーク化を進め特産品、民芸品等農業や地場産業との連携を強化しながら幅広い余暇ニーズに対応できる新しい観光レクリエーション拠点の整備を図るようにしている。

第5表 農家戸数及び耕地面積

区分	農家戸数(戸)			耕地面積(ha)					耕地率(%)	林野面積(ha)	
	専業	兼業	合計	兼業率	田	普通畑	樹園地	牧草地			計
市町村											
蕪崎市	509	2,498	3,007	83.1	1,100	249	822	2	2,173	15.1	9,288
市川大門町	78	502	580	86.6	84	41	175	3	303	9.3	1,897
六郷町	51	277	328	84.5	52	33	41		126	9.5	642
下部町	185	635	820	77.4	97	43	112		252	1.9	10,672
増穂町	130	968	1,098	88.2	172	29	277	12	490	7.5	5,136
鰯沢町	54	207	261	79.3	39	21	44		104	2.2	3,985
早川町	104	224	328	68.3	28	35	45		108	0.3	35,407
八田村	60	455	515	88.3	100	6	228		334	41.5	
白根町	339	1,385	1,724	80.3	111	11	992		1,114	28.5	2,089
芦安村	6	31	37	83.8	5	3	0		8	0.1	14,219
若草町	106	754	860	87.7	212	18	274		504	49.0	
榑形町	180	1,275	1,455	87.6	97	59	705	6	867	20.4	2,761
甲西町	173	935	1,108	84.4	242	35	383		660	40.5	262
計	1,975	10,146	12,121	83.7	2,339	583	4,098	23	7,043	6.6	86,358

資料：山梨県農林水産統計年報（平成2年度版）

第6表 農業粗生産額

単位：百万円

区分	農業粗生産		耕				種				畜					加工農産物	
	計	米	麦 雑穀 豆類	いも類 及び 野菜	果実 花卉	その他	養蚕	計	肉用牛	乳用牛	豚	鶏	その他	計	加工農産物		
市町村	5,582	4,012	68	610	1,946	179	268	1,302	540	17	323	420	2				
韭崎市	471	98	3	84	131	25	130	0				0					
市川大門町	143	53	3	49	13	2	19	4		4		0					
六郷町	296	92	8	94	16	16	59	8				6	2	3			
下部町	1,506	782	3	92	413	82	142	582	2	72	10	498					
増穂町	168	99	3	40	20	1	21	48				48					
鯉沢町	265	106	4	52	12	23	4	152			150	0	2	3			
早川町	1,379	1,261	2	124	958	69	97			4		93		21			
八出村	5,914	5,229	1	166	4,756	188	2	660		14	189	457		23			
白根町	16	16	3	13	0		0										
芦安村	1,718	1,666	5	442	915	83	25	27			21	6					
若草町	2,961	2,630	3	155	2,196	178	68	251	31	56	5	159		12			
榑形町	3,021	2,719	6	1,221	1,172	105	19	282		31	60	187	4	1			
甲西町	23,440	19,207	109	3,142	12,548	951	757	3,413	573	198	758	1,874	10	63			
計																	

資料：山梨県農林水産統計年報（平成2年度版）

第7表 工業統計及び商業統計

単位：人、万円

区分	事業所数	従業者数	製造品出荷額	商店数	従業員数	年間販売額
市町村						
葦崎市	148	5,255	12,633,950	45	228	683,363
市川大門町	85	1,763	2,209,225	39	279	905,985
六郷町	36	445	555,964	20	108	249,553
下部町	30	286	235,680	4	11	12,894
増穂町	64	1,228	2,010,355	29	109	289,100
鵜沢町	19	854	2,343,113	13	49	107,963
早川町	3	37	13,602			
八田村	37	958	1,944,706	5	14	49,129
白根町	61	1,536	3,015,305	23	185	716,970
芦安村						
若草町	37	746	1,713,401	19	138	496,310
榑形町	45	2,129	5,667,936	21	110	277,905
甲西町	71	3,316	8,473,823	28	153	505,316
計	636	18,553	40,817,060	246	1,384	4,294,488

資料：山梨県統計年鑑（平成3年度版）

（注）「事業所数」・「従業員数」・「製造品出荷額」は、4人以上の事業所である。

各論

I 地形分類図

1. 地形概説

調査図幅地域は大局的にはフォッサマグナの西縁付近にあたり、いわゆる糸魚川・静岡構造線が南北に縦断する。図幅の西部は赤石山地主要部東斜面、中央部は巨摩山地、東部は甲府盆地および御坂山地の西縁である。

赤石山地の主稜線は、北岳から間ノ岳(3,189m)農鳥岳を経て南へ延び、転付峠の鞍部を越えてさらに策ヶ岳(身延図幅)へと続く。その西側斜面は主として大井川上流域である。東側の急斜面は、この主稜線にほぼ平行するように北から南へ流れ下る早川の深い谷へ下っている。早川の谷底高度は図幅内では、およそ海拔1,000m~600mで、主稜線との間の起伏量は1,500~2,000mと極めて大きい。

早川の東側の山地は鳳凰山から南へ連続する稜線、甘利山の南部、楯形山から丸山、源氏山にかけての山地、および八町山から富士見山にかけての山地で、それぞれ海拔高度2,300~1,800m, 1,900~1,500m, 2,000~1,800m, 1,500~1,200m程度の山頂~稜線高度を示す。後三山地域は併せて巨摩山地をなし、楯形山山頂部や八町山に典型的にみられるように、顕著な平坦面が分布する。これらの山地の東斜面すなわち甲府盆地に面する中腹の海拔高度800~1,000m付近には平坦部分が南北に連なり、階段状の地形を示す。ここには古くから集落が成立していた。山地斜面の勾配についても、ここを境に変化し、以低ではやや緩くなる。

甲府盆地は、図幅内では御勅使川扇状地および巨摩山地東面からの小河川が形成した小扇状地群によって占められる。盆地の南縁付近に釜無川の沖積作用の及ぶ範囲が分布する。盆地底の高度は御勅使川扇状地扇頂で約450m、盆地南縁で245mであり、楯形山との間の起伏量は1,500m以上に達する。盆地と巨摩山地との境界は明瞭である、ほとんど沖積平野と山地斜面が接しているなかで、市之瀬台地のみが台地(段丘)化した扇状地から成る。この台地化および、先述した盆地一山地の明瞭な境界、さらに中腹の階段状の地形はいずれも断層運動の影響を示すものであろう。

富士川より東側は海拔高度400~600m程度の山地で、御坂山地の西縁にあたる。しかし地形的にはむしろ、楯形山~八町山にかけての山腹の地形と同じであり、

ここには地すべりが多く分布する。

甲府盆地を除けば、河谷における平坦地の発達は極めて悪く、早川や御勅使川などに沿って数ヶ所に分布するにすぎない。

このような地形とその南北配例は大局的には地質とその構造に支配されている点が多い。しかし、最も重要な糸魚川—静岡構造線は、大崖頭山の東面から夜叉神峠西を経て西山温泉へ達し、早川の谷地形のような主要な地形とその位置とは無関係である。現在構造（断層）運動が活発で、直接地形に現われているのはむしろ上述の盆地と山地の境界付近である。糸魚川—静岡線は地質の境界であり、西側は古第三系および中生層から成る。それらは赤石山地の主稜線に対応する南北の帯状分布を示す。東側の山地は新第三紀の御坂層群から成る。

調査地域の水系はすべて富士川水系に含まれる。主要な支流水系は、早川～野呂川水系および御勅使川水系で、これらの最源流部は主要な稜線の鞍部に達することが多く、山地をいくつかの山城に分けている。やや小さな水系は八町山と南の富士見山、楯形山を分ける大柳川、盆地南縁付近で富士川と合流する戸川などがある。

2. 地 形 区

空中写真判読と野外調査に基づいて、地形分類図を作成した。地形の連続性、起伏の程度、地形を作る物質、形成に関わる作用などを考慮し、さらに地形の地域的なまとまりを基準にして地形地域を設定した。山間の段丘や谷底平野、土石流による地形など孤立して点在する場合には、すべてを地形地域区分図（地形分類図の図部外）に記入していない。

地形地域区分

I 山 地	a. 赤 石 山 地	1. 鳳凰山山地 2. 白根山—策ヶ岳山地
	b. 巨 摩 山 地	1. 甘利山山地 2. 楯形山山地 3. 八町山—富士見山山地
	c. 御 坂 山 地	

II 丘陵地 台地	a. 市之瀬台地 b. 巨摩山地山腹平坦地	1. 釜無川低地
III 低地	a. 甲府盆地 b. 早川河谷低地 c. 御勅使川河谷低地 d. 富士川河谷低地	1. 釜無川低地 2. 御勅使川扇状地 3. 巨摩山地山麓小扇状地 4. 芦川扇状地 5. 鰍沢—黒沢低地 1. 湯島河谷低地 1. 芦安河谷低地 1. 鬼島—大柳川河谷低地 2. 甲斐岩間河谷低地

3. 地形詳説

I. 山 地

山地の地形はまず斜面勾配を分級して表現した。それらは、15°未満、15°～30°、30°～40°、40°以上の4段階である。これらの図上表現は色の濃淡により、茶色の濃いほど急勾配斜面である。この傾斜に基づく山地斜面分類とは別途に、山頂山稜、山腹の平坦面および顕著な凸型緩斜面、凹型緩斜面を重ねて示した。また、相対的に大規模な山地崩壊による崩落崖の地形、崩壊堆積物についても可能な限り図化した。さらに、小範囲ではあるが、地すべりに伴う小崖の地形、氷食地形と堆積物、高山稜線付近の岩屑斜面についても、傾斜による分類を重ねて表現した。

以上のような山地斜面の分類表示は、斜面勾配や地形的位置と、山地斜面上でみられる様々な地形現象との関係を考える資料を提供する。

図幅内の山地は大別すれば赤石山地（I a）、巨摩山地（I b）、御坂山地（I c）に分けられる。赤石山地は、鳳凰山地（I a 1）と白根山地（I a 2）に、巨摩山地は御勅使川河谷までの甘利山地（I b 1）、戸川と大柳川上流の谷によって分断される櫛形山山地（I b 2）と八町山—富士見山山地（I b 3）に細分される。

I a. 赤石山地

鳳凰山地（I a 1）はいわゆる鳳凰三山から南へ連続する稜線を伴う山地で、西

側は早川の谷，東側は御勅使川上流～北湯川の谷によって境される。図幅内では大崖頭山(2,186m)から夜叉神峠を経て西山温泉付近まで続き，糸魚川一静岡構造線はこの山地内を縦断している。したがって地質構造だけでなく，地質にも差異があるにもかかわらず，それらの影響は地形には現れていない。山地斜面は 30° ～ 40° の勾配が広く，稜線にやや広く緩傾斜部が分布する。大崖頭山の周辺ではその山地名の示すとおり，山地崩壊の分布が密である。

白根山地(I a 2)は，白根三山のうち間ノ岳，農鳥岳を含んでさらに南へ続く県境尾根の山地である。図幅の境付近にある転付峠の鞍部によって策ヶ岳山地(身延図幅)と分けられる。野呂川へ下る山地は 40° 以上の急勾配斜面が広く，稜線の一部に分布するやや緩勾配の斜面を除けば，ほぼ全域が 30° 以上の急斜面である。主稜線を含む広い範囲が四万十層群下部～中部層から成り，それらはほぼ南北方向に帯状に分布する。

白根三山の山頂部には氷河地形とそれらの堆積物が分布する。なかでも間ノ岳東面の細沢カール，北沢カールには明瞭なモレーンの地形が残されている。間ノ岳東面はまた崩壊も著しく，とくに本谷の崩壊はすでに山頂にまで達している。間ノ岳から農鳥岳に至るやや広い山頂尾根には多数の線状凹地が分布し，崩壊に関連する重力性のローカルな低断層崖の地形を作っている。これらは，大規模崩壊の前ふれとみることもできよう。

1 b. 巨摩山地

甘利山山地(I b 1)は甘利山(葦崎図幅)の南斜面で，御勅使川とその支流・金山沢，糸魚川一静岡構造線によって境され，主として桃ノ木層から成る。山地高度は図幅外では，2,138mの千頭星山，1,671mの甘利山が示すように，鳳凰山地(I a 1)から階段状に低下する前縁山地の一部をなす。山地斜面の勾配は， 30° ～ 40° が多く，赤石山地に比べれば，多少とも緩い。御庵沢源頭部には顕著な埋谷状緩斜面が分布し，巨大な崩壊に起源があるらしい。

楡形山山地(I b 2)は，甲府盆地の南西端を限り，東から遠望すると楡のような概形をした一つの山塊域にみえる。楡形山の山頂(2,051.7m)から源氏山を含むが，ほぼ丸山林道を境にして北部と南部に分けることもできる。

楡形山とその南へ続く八町山一富士見山山地(I b 3)の地形で顕著な点は，高

度 1,000m 前後に点在する高尾、平林、泊平などの集落を結ぶ線を境にして、山地斜面の勾配が明瞭に変化し、より緩勾配になる。上記集落ないしはその周辺には、平坦面が分布し、閉塞凹地や独立小丘などが連続する。これらの地形は、楕形山の隆起すなわち甲府盆地の成立に関連する断層運動、さらにその開始期と変化過程などの情報を含んでいると考えられるが、具体的な資料は極めて乏しい。同様な地形は南へ追跡することができ、富士見山東麓（身延図幅）では平須の丘陵地が発達する。

主として楕形山層の火山碎屑岩、凝灰質岩より構成される楕形山山地のもう一つの地形的特徴は、山頂部に顕著な平坦面～緩斜面が発達することである。また山頂付近には、明瞭な変位地形を伴う重力性の断層が認められ、その線上にあたる南西側にはやや大規模な山地崩壊が、堆積物とそれに関わる凹地（池）の地形を形成している。

山地斜面は、早川の各壁斜面では 40° 以上の急勾配部分が分布するが、概して $30^{\circ} \sim 40^{\circ}$ の勾配が支配的である。しかし、上述のように、楕形山東斜面の海拔 1,000m 前後以下では、 30° 以上の分布は小範囲になり、代って $20^{\circ} \sim 30^{\circ}$ ないし $15^{\circ} \sim 20^{\circ}$ の勾配の斜面が支配的になる。

八町山一富士見山山地（I b 3）は、戸川および大柳川の上流河谷によって境される標高 1,500m 以下の山地である。南方の富士見山とは大柳川の河谷によって独立した山地域を決めることができるが、本図幅では、富士見山山地は、ほとんど含まれないこと、地形的には同様に考えられる点が多いことから、同一の地形地域とした。この八町山一富士見山山地の地形は上述の楕形山山地と同様に、山頂部の顕著な平坦面、東斜面山の傾斜変換と、集落を伴う平坦面の発達などによって特徴づけられる。十谷温泉は、断層によると思われる傾斜変換線上で、しかも山地の崩壊堆積物の分布域に位置している。この山地の東縁をなす富士川の谷は、丘陵性になった山地を 100～150m 掘り込んでいる。富士川の左岸側の御坂山地（I c）西縁でも標高 400～500m の範囲が連続し、現在の富士川が深く狭い谷を掘り込む前には富士川河谷は、幅 10km 前後で、起伏の小さな地形を呈していたと推定される。南隣の身延図幅の平須砂礫層、甲府盆地南縁の太木台地、巨摩山地東斜面上の平坦面などが関連する諸現象である。

I c. 御坂山地

図幅の南東隅を占め、御坂山地の西縁をなす。ここでは、上述のように富士川河谷の発達過程で形成されたとみられる標高400~500mの丘陵性山地地形が特徴的である。地質は西八代層群の火山岩、砂岩、頁岩より成る。この山地の特徴の一つは地すべりが多く分布し、神有の地すべりのように、現在でもしばしば活動する。山地内に古くから集落が立地したのは、この地すべりによる地形と堆積物の分布と関連がある。

甲府盆地南縁には大木台地があり、かつての釜無川河床堆積物すなわち盆地床堆積物と考えられる厚い砂礫層が分布する。また、標高400m付近には、韮崎泥流と考えられる堆積物が分布する。しかし、地形的には波状の平坦面で、明瞭な段丘面はほとんど失なわれている。

II. 丘陵地、台地

II a. 市之瀬台地

市之瀬台地(II a)は、楕形山山地の東縁山麓に広がる、中小河川の新田扇状地群が断層変位を受けて隆起・開析された地形である。少なくとも3時期以上に分けられる扇状地、すなわち現在の台地面の形成期が認められる。最も高位の台地面は盆地側の縁に点在し、それぞれ、ムジナ丘、御殿山などと呼ばれてきた。そのうち、平岡東方の台地面は、あやめが丘岡地として住宅地化されている。これらの高位の台地表面は、扇状地形成時の傾きとは逆に楕形山に向かって傾き下がる。一方、深沢川より北側の中位の台地面は、その下位のとくに坪川に沿う低位面に比べて著しく緩勾配ではあるが、いずれも盆地側へ傾き下がり、等高線の配列も扇状地起源であることを示している。これらの台地(段丘面)は甲府盆地底に向かって台地の縁で急勾配になり、しかも古い台地面ほど顕著である。この事実、市之瀬台地東縁の崖は断層運動に伴う撓曲崖であり、現在もその活動は続いていることを示す。これらの崖の平面トレースは、新田の台地面およびそれらの勾配によって凹凸があり、断層が低角の逆断層であることを示している。この断層崖の高さは130~140mであるが、市之瀬台地南東縁の思沢出口(湯沢)付近の海拔350m付近に高位の台地を作る堆積物中に韮崎泥流堆積物が挟まれることから、

断層運動が活発化して、市之瀬台地の形成が始まったのは韮崎泥流下以降である。この付近の盆地床下では、韮崎泥流は海拔高度 130m 付近に挟在することがボーリング資料からわかっているため、市之瀬台地前縁の断層を境にして約 200 m 以上変位している。ただし、この値は、断層面の角度は考慮されていないので、真の断層変位量はより大きくなる。

市之瀬台地の山地側の境界でも、断層によって新田の扇状地面が分断されている。坪川の低位面は上市之瀬南西の右岸で比高約 20m、中位面は平岡付近で比高 50m 以上の断層崖を伴う変位を受けている。これらの断層崖の比高に基づく断層運動のみかけの平均変位速度は、1000 年あたり、いずれも約 1 m と一致する。楯形山地東縁の主要な谷沿いには、高位に断片的に河成段丘面が分布するが、市之瀬台地の地形との関連はよくわかっていない。

以上のような考え方で同様に説明できるのが、御勅使川右岸の築山台地と呼ばれる段丘で、御勅使川の古い扇状地の残片である。このような地形と断層が甲府盆地と楯形山地を分化してきたことは確実である。楯形山中腹の平坦面が、甲府盆地成立の過程でかつて甲府盆地西縁に位置した可能性があるかどうかという観点も必要であろう。

II b. 巨摩山地中腹平坦地

すでに記述したように、巨摩山地中腹の海拔 1000m 前後に発達する平坦地である。楯形山から八町山東斜面の傾斜変換部にあたり、山地斜面、とくに尾根部の平坦面ならびに河谷沿いの相対的低地から成る。河谷沿いの低地は、多くは新田の上石流起源の堆積面である。分布位置を考慮して、台地・丘陵地に区分した。

III. 低地

低地の地形分類図では、単位地形の分類を重ねて、地表面の勾配を表現した。傾斜は 2.5 万分の 1 地形図の等高線によって、 3° 以下の勾配の地域をさらに $\frac{1}{2}^{\circ}$ 、 $\frac{1}{4}^{\circ}$ を境界値として細分した。このような低地の傾斜細分は、地形の特徴をよく説明する。すなわち、小範囲ではあるが釜無川の扇状地は $\frac{1}{2}^{\circ} \sim \frac{1}{4}^{\circ}$ の範囲に対応し、御勅使川や戸川の扇状地は $\frac{1}{2}^{\circ} \sim 3^{\circ}$ に範囲に入り、山麓の小扇状地扇頂部は $3^{\circ} \sim 8^{\circ}$ の勾配を示す。また、 $\frac{1}{4}^{\circ}$ の境界は甲府盆地の低湿地域にあたっている。

図幅内には、甲府盆地(Ⅲa)のほかにはまとまった広がりを伴う低地は発達しないが、場所によって早川河谷低地(Ⅲb)、御勅使川河谷低地(Ⅲc)、富士川河谷低地(Ⅲd)に分けられる。

Ⅲa. 甲府盆地

甲府盆地はさらに、釜無川低地(Ⅲa1)、御勅使川扇状地(Ⅲa2)、巨摩山地山麓小扇状地(Ⅲa3)、芦川扇状地(Ⅲa4)、鯨沢・黒沢低地(Ⅲa5)に細分できる。

図幅内には釜無川の扇状地はほとんどみられない。わずかに若草町の一部に御勅使川扇状地の末端部と合流的に形成したらしい等高線の配列(250mコンター)が認められる。釜無川低地は、甲府盆地南部において、ほとんど勾配を持たない後背湿地的な地形を呈する。扇状地との境界は、勾配 $\frac{1}{4}$ の値に極めてよく一致する。釜無川の現河床は、細礫～小礫から成り、運搬物質の性質からみると、扇状地の地形が盆地南縁まで広がってもよい。低湿地の発達はおそらく、甲府盆地の排出口が富士川の狭谷にあたり、逆流ないし湛水をもたらした地形的な要因が大きな効果を持っていると思われる。それは歴史的な洪水の記録の示すとうりである。同様の現象は笛吹川の河床物質についてもあてはまる。すなわち、水理量の大きな釜無川に合流して、一種のせきとめ作用を受けるような配置になる笛吹川は、基準面を釜無川によって決められるようになり、合流点からかなり上流まで砂がちな河床である。甲府図幅の中道橋付近において急激に礫質河床へ変化するのはこの影響であろう。

以上のような解釈は、釜無川氾濫低地と接する巨摩山地山麓小扇状地を形成する小河川が、いずれも天井川となって延び、釜無川に合流することにも適用できよう。

御勅使川扇状地(Ⅲa2)は、図幅内の低地の大半を占める。標高は扇頂部で約450m、扇端部で245mであり、その半径は最大約10kmである。図幅北東縁では、釜無川の側方侵食を受けて扇状地面が失われ、その勾配分に相当する崖が形成され、段丘化している。しかしこの崖と地形は御勅使川扇状地が段丘化(開析)されつつあることを意味するわけではない。このことは、扇状地面上に残されている石積出し、将棋頭などのいわゆる信玄の治水工事跡からも容易に理解できる。

上述の側方侵食崖直下には、御勅使川の洪水時の派川による小扇状地がすでに形成されている。また、この崖が南へ向って急に消滅するように見えるのは、西野の北東方、徳永付近で扇状地の堆積物に覆われたためであろう。

巨摩山地の東縁には中小河による小扇状地が連なっている(Ⅲa3)。市之瀬台地もかつてはその一部であったが、断層変位によって台地化し、すでにその台地縁に新たな扇状地が形成されている。戸川、利根川の合流扇状地は半径3kmと相対的に大きく、やや緩包配であるが、他は小規模かつ急勾配で、沖積錐的なものもある。また、段丘化した残片も分布する。

同様な小扇状地が御坂山地に流域を持つ芦川および小河川によって形成され(Ⅲa4)、市川大門の市街地はその地形上に立地している。

甲府盆地からやや入り込んだような位置を占めるのが、鯉沢・黒沢の狭い谷底部で、新川の沖積平野から成る(Ⅲa5)。

Ⅲb. 早川河谷低地

早川は深い峡谷を穿っており、谷壁斜面の勾配は40°を超えることが多い。また起伏量も大きく、山地斜面からの物質供給が多いため、谷底部はほとんど河床になる。谷底部で相対的な低地を形成するのは、地形的には主として段丘、新田の土石流堆積地形である。それらが比較的まとまって分布するのが、湯島付近である。その他に、西山温泉、奈良田などに点在するが、地形地域区分図には図示していない。

Ⅲc. 御勅使川河谷低地

芦安村の芦倉付近には、新田の土石流堆積地形、谷底平野があり、ここを御勅使川河谷低地(Ⅲc)とした。低地とはいっても上記のように山間の相対的な低平地であり、たとえば旧土石流堆積物を侵食する崖は場所によっては現河床から数十mにも達する。

Ⅲd. 富士川河谷低地

富士川本流に沿っても低地の発達は悪い。鬼島から鹿島にかけて、富士川の側刻に伴う低平地がわずかに形成されたにすぎない。ここには土石流堆積地形、段丘も分布する。谷底平野は狭いけれども、むしろ大柳川に沿って連続がよく、併せて鬼島―大柳川河谷低地(Ⅲd1)とした。

甲斐岩間付近には比較的広い低地が広がるが(身延図幅)、その上流部の貧弱な谷底平野を甲斐岩間河谷低地(Ⅲd2)として区分した。

4. 起 伏 量

5万分の1地形図「鰍沢」および「大河原」図幅の各辺を20等分して得られるすべてのメッシュについて、最高点と最低点の標高差を求め、これを起伏量とした。それらの値を>50m, 50~100m, 100~200m, 200~400m, >400mの5階級に区分し、起伏量の小さい方からそれぞれ1, 2, 3, 4, 5の数字で表して起伏量図とした。

起伏量は単位面積あたりの地形の急峻さ、平坦さを表現する。全体としては、平坦な甲府盆地と山地の差が明瞭である。起伏量2ないし3の起伏量50~100m, 100~200mの示す範囲が狭く、盆地から山地への移行がはっきりしている。2ないし3の起伏量は市之瀬台地のように、台地ないしは段丘とそれらを比較的深く下刻する谷地形が発達する場合にあたる。

山地の起伏量は5と4である。とくに起伏量400m以上の大起伏の山地が大半を占める。それらは、赤石山地、楡形山~八町山にかけても同様である。しかし、楡形山~八町山の東側斜面のうち、中腹に点在する集落以東(以下)では、起伏量は4(400m~200m)とやや小さくなる。この傾向は、富士川河谷の両岸山地についてもあてはまる。赤石山地や巨摩山地の大起伏量のなかに点在する4の部分は、本図幅内で特徴的な山地地形の一つである山頂の平坦部、緩傾斜部がほぼ1メッシュ以上にわたって広がっている場合である。

その他の山地では、早川、御勅使川あるいはそれらの支流は深く山地を侵食していることが起伏量から読み取れる。

(平川一臣・吉村 稔)

起 伏 量 图

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x
A	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	4	1	1	1	1	1
B	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	4	2	1	1	1	1	1
C	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	4	4	2	1	1	1	1
D	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	4	1	1	1	1	1
E	4	5	5	5	5	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	4	5	3	1	1	1	1
F	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	4	4	1	1	1	1	1
G	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	4	4	1	1	1	1	1
H	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	5	5	5	4	4	2	3	1	1	1	1
I	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	4	3	3	1	1	1	1
J	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	5	5	4	4	3	1	1	1	1
K	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	4	1	1	1	1	1
L	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	5	4	5	5	5	5	5	4	4	1	1	1	1	1
M	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	5	4	4	1	1	1	1	1
N	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	3	1	1	1	3
O																								
P																								
Q																								
R																								
S																								
T																								

1 : <50m
 2 : 50~100m
 3 : 100~200m
 4 : 200~400m
 5 : >400m

II 表層地質図

本図幅の西側には赤石山地、中央部には巨摩山地、東側には市之瀬台地の丘陵地と甲府盆地西縁の低地があって、図幅は三つの地形的に異なる地域に区分される。

西側の赤石山地は北側図幅外の北岳より南に連なる標高2,000m以上の高山地域で、北より大唐松山(2,554.8m)、雨池山(1,936.8m)、白剝山(2,237.2m)、別当代山(2,215.0m)の高峰が連なり、南アルプスとよばれ日本列島の最高峰地帯である。

中央部の巨摩山地は赤石山地に平行して南北に連なる山地で、標高は2,000m内外である。北から大崖頭山(2,186.5m)、高谷山(1,842.1m)、櫛形山(2,001.7m)、源氏山(1,907.6m)等の中位高峰が連なる。

この巨摩山地の東側には甲府盆地に面して丘陵地帯が南北に連なり、その標高は1,000m内外で市之瀬台地と呼ばれる。

甲府盆地地域は釜無川の右岸地帯で、巨摩山地に源流をもつ河川による扇状地地形が形成されている。

赤石山地と巨摩山地は糸魚川・静岡構造線により境されている。この構造線に沿って南流するのは野呂川で、野呂川は多数の支流をもち、中流では早川と名を変え下流では富士川に合流する。巨摩山地に源流をもつ河川としては御勅使川が最も大きく東流して釜無川に合流する。この合流点には信玄堤が建設されている。この御勅使川が山地より盆地への流入地帯には大規模な扇状地が形成されている。その他に利根川、戸川、大柳川等の巨摩山地に源流をもち釜無川に合流する河川がある。

地形と地質との間に関連があって野呂川を通る糸魚川・静岡構造線はフォッサマグナの西縁をつくり、この構造線を境にして日本列島は東北日本と西南日本に二分される。赤石山地は先新第三紀に属する四万十層群の粘板岩、砂岩、珪岩よりなり、時に石灰岩、輝緑凝灰岩の薄層を挟んでいる。御勅使川下流域に露出する四万十層群は石英閃緑岩に貫かれて接触変成作用を蒙りホルンフェルス、珪岩、結晶質石灰岩に変成されている。巨摩山地は新第三紀御坂層群よりなり、砂岩、泥岩および玄武岩質変朽安山岩、同質緑色凝灰角礫岩、石英安山岩質溶岩、同質凝灰角礫岩より構成されている。市之瀬台地の丘陵地帯は主として洪積世末に堆積した角礫質礫層

およびローム層よりなる。盆地区域は扇状地堆積物の砂礫層より構成される。

1. 未固結岩類

1-1 沖積堆積物

甲府盆地は厚い沖積層に覆われている。図幅の東南部には釜無川と笛吹川の合流点があって、この合流点周辺部では沖積堆積物の厚さは110mをこえ甲府盆地では最も沖積堆積物の厚い地域である。堆積物は砂礫層である。

また図幅内各河川には沖積堆積物がみられる。とくに早川では堆積物が厚く、山地から多量の土砂が供給され、各所に埋没谷が形成されている。早川上流の奈良田ダムではダム建設後、数年にしてダム上流域が埋没した。埋没土砂の厚さは電気探査結果では50mをこえている。

1-2 扇状地堆積物

巨摩山地より甲府盆地に流入する各河川には盆地への流入部に扇状地が発達する。御勅使川扇状地は最も規模が大きい。扇状地堆積物の厚さは100mをこえる。その他、早川では支流との合流点には小扇状地がみられる。

2. 半固結堆積物

2-1 ローム層

各山地山頂にはローム層の堆積がみられる。山頂の層厚はうすいが、堆積後流出し、山腹下底には再堆積した二次堆積ローム層がみられる。

2-2 洪積層

上部曾根層群および下部層根層群よりなる。下部層根層群は砂層、礫層、石英安山岩質溶岩流、および同質凝灰角礫よりなる。上部層根層群は角礫質礫層よりなる。図幅内では東南部に露出する。上部層根層群は市之瀬台地を中心とした巨摩山地前面の丘陵地帯に広く露出する。

3. 火山噴出物

層根層群には多量の火山堆積物を伴っているが、大木台地にみられる岩脈は幅約1.0mである。その貫入期は甲府火山群活動期と同じ洪積世末である。

4. 固 結 岩

赤石山地、巨摩山地は四万十層群および御坂層群より構成される。その層序を示せば次のとおりである。

第 四 紀 河 床 堆 積 物	砂礫層
沖 積 世 扇 状 地 堆 積 物	
第 四 紀 上 部 曾 根 層 群	角礫質礫層
洪 積 紀 下 部 曾 根 層 群	砂層、礫層、粘土層、石英安山岩質溶岩流、 同質凝灰角礫層
新第三紀 御 坂 層 群	石英安山岩溶岩流、同質凝灰角礫岩 砂岩・泥岩互層 玄武岩質変朽安山岩、同質凝灰角礫岩
古第三紀 四 万 十 層 群 三 疊 紀	千枚岩、硬砂岩、石灰岩、珪岩、輝緑凝灰岩

5. 深 成 岩

図幅の北側の御勅使川下流域の両岸の山地には石英閃緑岩が露出する。この石英閃緑岩の貫入により周辺の四万十層群は接触変成作用を蒙り、ホルンフェルス結晶質石灰岩似変成されている。

6. 地 下 水

御勅使川扇状地では、地下水層は深く、深度 200m 内外である。扇状地内には多数の地下水井が分布しているが、いずれも掘削深度は深い。

7. 温 泉

本図幅内の温泉は、温泉湧出地の地質により次の三つに区分される。

- (1) 糸魚川・静岡構造線 西山温泉, 奈良田温泉
- (2) 御坂層群 芦安温泉, 芦安村村営温泉, 桃の木温泉
- (3) 甲府盆地 八田温泉

糸魚川・静岡構造線の西山温泉の泉温は45～46℃, 泉質はアルカリ泉, 奈良田温泉の泉温は42℃, 泉質は食塩泉である。御坂層群中の温泉は, 芦安村村営温泉, 桃の木温泉, 桃源天笑閣温泉で御坂層群中の断層に沿って湧出するが, 泉温は30～40℃で泉質は単純泉である。甲府盆地の温泉は八田村の八田温泉で, 温泉ボーリング深度は1000m, 泉温35℃である。この他八田村には泉温33℃で農業用に利用されている温泉がある。

この他に泉温は低いが硫黄泉, 緑礬泉等の鉱泉が十谷, 戸川にみられる。

8. 災 害

8-1 山崩れ

野呂川, 早川沿岸では地形が急峻で, 且つ四万十層群の各岩類には片理が発達し, そのために山崩れの発生が多い。また豪雨時には土石流の発生が多く, とくに広河原付近では常習的土石流発生河川がみられる。

8-2 地すべり

大柳川沿岸付近, および図幅東南部の六郷町では地すべりが多発する。とくに六郷町にはベントナイト化凝灰質泥岩が露出し, ベントナイトの膨潤を原因とする地すべりが発生する。

8-3 地震

早川・野呂川沿岸では糸魚川静岡構造線に沿って地震の発生は多く, 時にマグニチュード6以上の被害地震が発生するが一般にはマグニチュード5以下の無被害地震が殆んどである。

参 考 文 献

- 浜野一彦他 (1970) : 山梨県地質誌・山梨県
- 浜野一彦他 (1972) : 山梨県土地分類調査20万分の1・山梨県
- 浜野一彦 (1974) : 甲府構造線および富士八ヶ岳構造線・山梨大学教育学部紀

要No. 5

浜野一彦他 (1982) : 土地分類基本調査 (甲府) ・山梨県

浜野一彦他 (1986) : 土地分類基本調査 (韮崎・市之瀬) ・山梨県

(浜野一彦)

Ⅲ 土 壤 区

耕地の土壤

1. 淡色黒ボク土壤

台地及び山麓地の傾斜面に分布し、表層の腐植層の厚さ25cm以下と浅い土壤、及び全層とも腐植含量の少ない火山灰土からなる土壤である。土性は壤質が主であるが、50cm内外より下層が礫質土となるものも含む。火山灰（非固結化成岩）を母材とするため表土は軽しょうでりん酸固定力は強い。

これに属する丸山統は腐植層を有しない火山灰土層からなり、土性は全層粘質である。本区副内では、橿形町内の台地上に僅か分布し、果樹園・桑園・野菜畑として利用されている。

2. 褐色森林土壤

山麓斜面及び山間の傾斜面に分布する。この土壤は火山性重粘土が主で、全層の腐植含量が少なく、粘性、可塑性の強い土壤である。

これに属する土壤統は、小坂統、最上統、笠山統、岳辺田統、前川統および長笹統がある。土性及び腐植層の有無、砂礫層の有無、堆積様式により区別される。最上統及び笠山統、前川統、長笹統はいずれも洪積世堆積であるが小坂統は残積、岳辺田統は崩積である。最上統は強粘質土であり笠山統は粘質土、前川統は礫質土である。また、前川統は40cm以下に砂礫層が存在する等から区別している。

本区幅内では、小坂統は富士川流域の山腹斜面に分布し、主に桑園として利用されている。最上統は八田村内、笠山統は橿形町内の台地上に僅かに分布し、主に果樹園として利用されている。岳辺田統は西部山腹斜面に広く分布し、桑園・果樹園として利用されている。前川統、長笹統は主に御勅使扇状地域に広く分布し、主に果樹園として利用されている。

3. 黄色土壤

全層の腐植含量は少なく下層土の色が黄～黄褐色を呈し、土性は主に強粘質であり、水田利用によるかんがい水の影響による斑紋が認められる土壤である。こ

れに属する氷見統は全層腐植含量が少なく、表土の土性は強粘質で下層土は礫含量が多い。

本図幅内では、釜無川支流の坪川沿いに分布し、主に水田として利用されている。

4. 褐色低地土壌

この土壌は沖積低地に分布し、全層あるいはほぼ全層が黄褐色の土層からなり、腐植含量は少なく、壤質の土壌である。これに属する土壌統に外城統及び常万統、塩田統がある。土性及び斑紋の有無・砂礫層の有無により区分される。外城統・塩田統は砂質土であるが常万統は粘質土である。また、塩田統および外城統は0～30cm以内より礫層となる等から区分している。

本図幅内では、外城統は御勅使扇状地の平坦地に広く分布し、主に果樹園として利用されている。常万統は滝沢川沿いに僅かに分布し果樹園として利用されている。塩田統は御勅使扇状地の上扇に分布し、水田として利用されている。

5. 灰色低地土壌

この土壌は沖積低地に分布し、全層が灰色または灰褐色を呈し、壤質の土壌である。これに属する土壌は登戸統、真宮統がある。登戸統は全層壤質土で斑紋を有する。盆地内に帯状に粗粒灰色低地土壌やグライ土壌に挟まれた形で分布し、場所によっては島畑的な形状で分布する。水田、果樹園、野菜畑などに利用されている。真宮統は灰色を示す壤質土で斑紋を有しない。本図幅では釜無川沿岸に分布し果樹園として利用されている。

6. 粗粒灰色低地土壌

河成沖積低地に分布し、全層の腐植含量が少なく、土性は壤～砂質であり、下層土の色が主に灰～灰褐色を示す土壌である。

これに属する土壌統は、追子野木統、安米統、松本統、栢山統がある。共に腐植含量は少なく壤質土壌であるが、砂礫層の出現位置および土色等により区別される。栢山統は砂礫層が0～30cm以内より現れ、松本統は30～60cm以下である。

また追子野木統の土色は全層灰色であり、他は灰褐色である等から区別している。

本図幅内では、追子野木統は釜無川沿岸の平坦地に分布し水田として利用されている。安来統は御勅使扇状地の土扇に分布し、水田・果樹園として利用されている。松本統・栢山統は御勅使扇状末扇地域に分布し、主に果樹園として利用されている。

7. 細粒グライ土壌

この土壌は沖積低地に分布し、土壌中にグライ層が存在し、全層または表層が粘質～壤質土の土壌である。これに属する土壌統に琴浜統がある。琴浜統は表層が壤質土で下層は砂質土であり、地下水位は45cm内外であるが、夏期には20～30cmまで上昇する。本図幅内では富士川沿いの低地に分布し、水田・野菜畑として利用されている。

8. 粗粒グライ土壌

この土壌は沖積低地に分布し、土壌中にグライ層が存在し、砂質土からなる土壌である。これに属する土壌に八幡統、竜北統がある。八幡統は全層砂質土で斑紋があり、グライ層は50～60cmから出現する土壌である。竜北統は30cm以内より砂礫層となる土壌である。本図幅内では両土壌とも釜無川沿いに広く分布し、水田・野菜畑などに利用されている。

(秋山康三)

山地及び丘陵地の土壌

1. 乾性褐色森林土壌

褐色森林土のうちBA、BB、BCに相当する乾燥型土壌である。A₀層はF、H層が主で、A層は黒褐色ないし、暗褐色である。B層との境は判然としており、土壌中に菌糸をみることがある。これに属する土壌統としては芦安1統、早川1統、甘利2統、楡形1統、身延2統、網倉1統の各統である。分布域としては尾根線から山腹上部である。主として天然広葉樹林及びヒノキ、アカマツ、カラマツ人工林として利用されている。

2. 褐色森林土壌

褐色森林土のうちB_D(d), B_D型に相当する適潤型土壌である。A₀層はほとんどなく、A層は黒褐色で腐植に富み、団粒状構造がよく発達している。層位が厚く、B層との境は漸変である。これに属する土壌統としては芦安2統、早川2統、甘利3統、楡形2統、身延3統、網倉2統の各統である。これらの各統は山腹中部から山脚部にかけて分布しており、主にスギ、ヒノキ、アカマツ、カラマツの人工林として利用されている。

3. 乾性ポドゾル化土壌

ポドゾル土壌のうちP_DI~P_DIII型に相当する土壌である。A₀層はきわめて厚くF、H層がよく発達している。A層はうすく、B層にチョコレート色をした集積層がみられる。これに属する土壌統は芦安3統、早川4統である。分布域としては赤石山地の主稜線に溶脱層のはっきりしたP_DI型がみられ、その下部にP_DII、P_DIII型がみられる。主として天然生針、広混交林が生育している。

4. 湿性ポドゾル化土壌

ポドゾル土壌のうちP_W(h)I~P_W(h)IIIに相当する土壌である。A₀層は厚く、特にH層がよく発達している。土壌断面は暗く、腐植の集積がはっきりしている。これに属する土壌統は芦安4統、早川5統の各統である。分布域は赤石山地の山頂平坦部及び巾広い凹型緩斜面にみられ、主として天然生針・広混交林が生育している。

(馬場勝馬)

IV 傾斜区分図

5万分の1地形図「鵜沢」,「大河原」図幅について、すべての等高線の間隔に基づいて地表面の傾斜を計測・分類し、図化した。分級は 40° 以上、 $40^{\circ}\sim 30^{\circ}$ 、 $30^{\circ}\sim 20^{\circ}$ 、 $20^{\circ}\sim 15^{\circ}$ 、 $15^{\circ}\sim 8^{\circ}$ 、 $8^{\circ}\sim 3^{\circ}$ 、 3° 未満である。さらに 3° 以下の地域について、2万5千分の1地形図の等高線に基づいて $3^{\circ}\sim \frac{1}{2}^{\circ}$ 、 $\frac{1}{2}^{\circ}\sim \frac{1}{4}^{\circ}$ 、 $\frac{1}{4}^{\circ}$ 未満に細分し、地形分類図上に黒細線模様で表現した。

傾斜の分布傾向の相違は、概観した時に4つの地域に分けられる。すなわち、 40° 以上の急勾配斜面が支配的な早川河谷～赤石山地主稜線までの山地斜面、 $30^{\circ}\sim 40^{\circ}$ の勾配の斜面を主として、より急傾斜ならびにより緩傾斜部が点在する早川から楡形山中腹の傾斜変換部までの山地斜面、 $30^{\circ}\sim 20^{\circ}$ と $20^{\circ}\sim 15^{\circ}$ の勾配の斜面を中心に 30° 以上の急傾斜部が入り組む楡形山東麓から御坂山地西縁、および甲府盆地の低地である。

巨摩山地で特徴的なのは、楡形山・八町山の山頂部に発達する顕著な平坦面で、 $8^{\circ}\sim 15^{\circ}$ の緩勾配もみられる。

市之瀬台地と、巨摩山地東縁の小扇状地群は $3^{\circ}\sim 8^{\circ}$ の勾配を示す範囲が広い。一方、甲府盆地の低地は、御勅使川扇状地頂部まですべて 3° 未満の勾配である。しかし、さらに 3° 以下の地域を細分すると、地形の項で記述したように、相対的に緩勾配の釜無川の沖積作用が及ぶ扇状地、氾濫平野がそれぞれ $\frac{1}{2}^{\circ}$ 、 $\frac{1}{4}^{\circ}$ の勾配境界線に一致するようにみえる。

以上のような傾斜区分と地形分類との対応関係は、地形の定性的な説明だけでなく、成因的な関与をも示唆していると考えられる。ただし、分級の境界値が意味があるのではなく、それぞれの分級の山の中に様々な意味に分かれた臨界値が含まれていると思われる。

(平川一臣・吉村 稔)

V 水系・谷密度図

5万分の1地形図「鯉沢」、「大河原」図幅の各辺を40等分して得られるメッシュの区画線を切る水流（谷）の和を4メッシュごとに集計したものを谷密度とする。その基礎資料である水系図は、上記地形図幅上の水流ならびに、等高線から判読されるすべての谷線を示したものである。

水系パターンの最も顕著な差は、甲府盆地と山地においてみられる。甲府盆地の水系は本流の富士川に合流するように基本的には傾斜方向に流れる。御勅使川扇状地の現在の流路は、いわゆる信玄の治水を反映して著しく北に偏在している。

市之瀬台地は巨摩山地に流域を持つ河川が堆積・侵食作用によって形成したことを示す水系を示すが、南～東縁では台地内に小さな流域が形成され始めている。これらの河川および山麓に小扇状地を形成する巨摩山地起源の河川は、山地内ではほぼ東西方向の流路をとり、盆地に出てから、盆地南縁に向って南流する。

山地内の水系パターンは、全体としては地域差は小さく、樹枝状あるいは羽毛状である。しかし、やや大きな支流の方向は、南北および東西が目立つようになり、断層や地質の構造の影響を示す。

水系の発達は顕著で、隣り合う水系が山地稜線、山頂部にまで達していることが多い。しかし、楡形山や八町山の山頂部にみられるように、比較的広い山頂平坦部の局所的な水系未発達域もある。

谷密度は、山地では一般に30前後を示し、第三紀層と中生層の地質差を反映していない。盆地周縁の山麓の谷密度は、20前後以下の範囲が広がる。市之瀬台地は10前後、甲府盆地では、全く水流を持たないメッシュもかなり多い。

(平川一臣・吉村 稔)

VI 土地利用現況

本調査地域は、南アルプス国立公園・県立南アルプス巨摩自然公園に指定された地域を含み、調査面積 420km² に対し約 300km² が森林で、その内約 220km² が県有林、約 210km² が保安林でそれぞれ占められ、白根山系の間ノ岳、農鳥岳等 3,000m 級の山々が連なる山岳地域となっており、河川、道路沿いに農耕地、住宅地が散在している地域と、甲府盆地に属した平坦地に農耕地、住宅地が広がり都市化の進んだ地域からなっている。

御勅使川の扇状地は砂礫地で土壌が乾きやすく、過去には桑園が多く一般の作物は少なかったが、近年農業用水の確保、栽培技術の向上に伴い、モモ、ブドウなどの果樹栽培が進められ一大産地となっている。また、この平坦地には工業団地の整備等企業誘地が行われ人口が増加することに伴う住宅地の確保、及び道路等公共施設の整備などにより農耕地から宅地への転用が進み農耕地は減少傾向にある。

資 料

コンピューター・マッピングについて

山梨県では、土地分類基本調査成果の活用を図るため、昭和61年度から地形、表層地質、土壌の3図幅の印刷についてコンピューター・マッピング方式を採用し、土地利用現況図についても、印刷業者の協力により、地図情報をコンピューターに入力しております。

“コンピューター・マッピング方式”とは、「コンピューターに地図情報を入力し、入力したデータを機械が解読し、これに基づいて印刷する」という方式です。

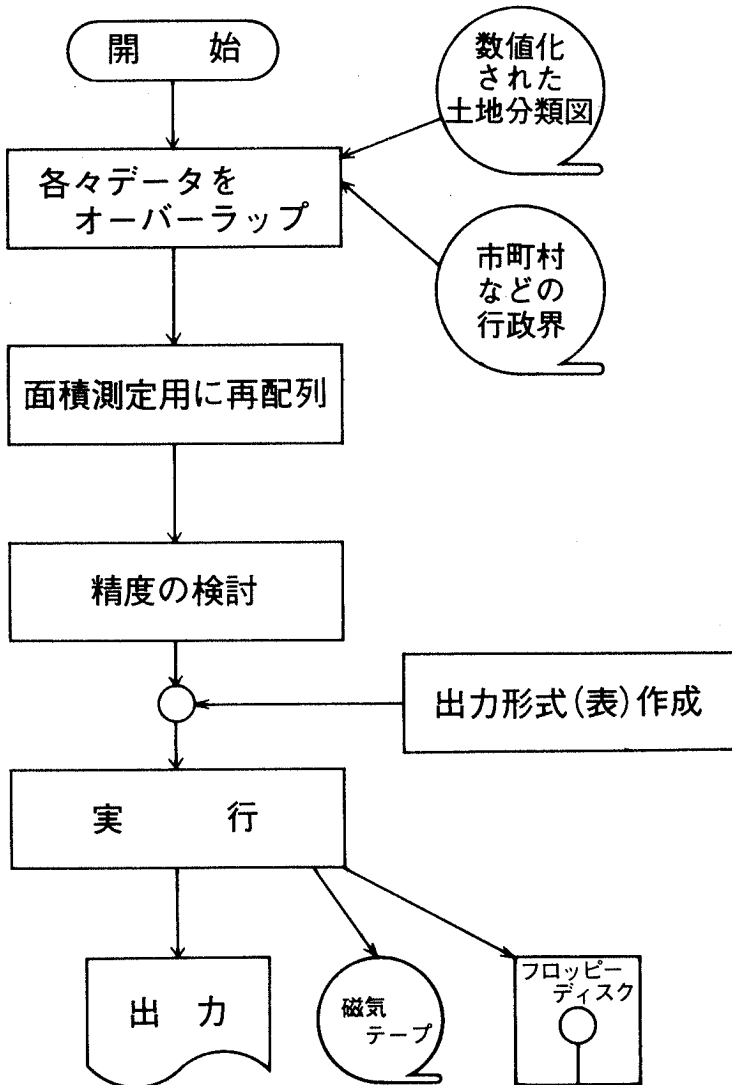
この方式により、複数の図面を重ね合わせた複合図面の作成や各凡例ごとの面積測定が可能になり、各種災害の危険地域を予測したり、利用目的ごとの開発の可能性を判断するなど、行政機関が計画を立案・検討する際に欠かせない重要な資料となります。

本年度のコンピューター・マッピング方式の成果として、地形分類図と土地利用現況図の面積測定の結果を登載いたしました。

なお、コンピューター・マッピング方式の採用により、この土地分類基本調査の成果がさらに多くの場で活用されることを希望しております。

土地分類基本調査における面積測定について

数値化された地図情報の利活用の1つとして面積測定が上げられます。今回の面積測定は、下記の流れによって作業を実施いたしました。



作成できる面積測定表の例

① 1 図葉中での各凡例の面積測定

〈例 1〉

② 1 図葉中での、市町村を単位とした各凡例の面積測定

〈例 2〉, 〈例 3〉, 〈例 4〉, 〈例 5〉

※入力されたデータ（面積測定成果）は、磁気テープ、フロッピーディスク等での保管が可能になり、従来の地図原図に比べて場所を取りません。また、成果の維持管理が容易であり、統一化した精度の図面を常時短時間で印刷することができます。

〔例-1〕

市町村面積測定結果

単位：km²

市町村名	面積
蕪崎市	1.56
市川大門町	15.84
六郷町	3.71
下部町	0.01
増穂町	65.17
鯉沢町	35.76
早川町	125.64
八田村	5.05
白根町	32.13
芦安村	75.57
若草町	5.56
櫛形町	42.56
中西町	15.69
合計	424.25

〔例-2〕

低地・凸型斜面・凹形斜面の面積測定結果

単位：ha

市町村名	低地<1/4°	低地1/2°~1/4°	低地3°~1/2°	低地8°~3°	岩屑斜面	顕著な凹型斜面	山頂及び山稜平坦部、顕著な凸型斜面
蕪崎市	0.0	0.0	55.2	0.0	0.0	0.0	0.0
市川大門町	111.2	0.0	88.1	0.0	0.0	0.0	53.2
六郷町	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
下部町	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
増穂町	116.5	0.0	541.6	70.4	0.0	12.4	182.6
鯉沢町	24.0	0.0	67.2	0.0	0.0	3.8	96.8
早川町	0.0	0.0	0.0	0.0	3.5	12.3	144.8
八田村	0.0	0.0	436.3	0.0	0.0	0.0	0.0
白根町	0.0	0.0	1708.2	0.0	0.0	0.0	2.3
芦安村	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.0	18.4
若草町	0.0	44.1	445.3	0.0	0.0	0.0	0.0
櫛形町	0.0	0.0	1090.3	90.9	0.0	2.0	79.0
中西町	343.5	61.8	631.4	92.7	0.0	0.0	2.3
合計	595.2	105.9	5063.6	254.0	3.5	33.5	579.4

〔例-3〕

地形分類面積測定結果（市町村別）

單位：ha

凡例名	龜崎市	菊川町	六郷町	下部町	増穂町	鉢沢町	早川町	八田村	白根町	芦安町	若草町	櫛形町	甲西町	合計
山地斜面 $>40^{\circ}$	0.0	0.0	0.0	0.0	196.8	250.9	3875.7	0.0	75.0	1715.7	0.0	31.0	0.0	6145.1
山地斜面 $>30^{\circ} \sim 40^{\circ}$	38.1	180.9	88.7	0.8	3162.2	2219.9	7319.2	0.0	793.7	4875.9	0.0	1278.9	28.3	19986.6
山地斜面 $>15^{\circ} \sim 30^{\circ}$	21.5	812.1	226.6	0.0	1828.2	637.7	1028.5	0.0	384.3	769.7	0.0	1120.9	223.5	7053.0
山地斜面 $<15^{\circ}$	7.6	99.1	39.2	0.0	318.3	76.7	86.4	0.0	31.2	61.3	0.0	126.8	31.1	877.7
新期土石流地形	4.7	14.9	0.0	0.0	19.6	24.5	19.5	0.0	52.9	13.1	0.0	8.3	0.0	157.5
古期土石流扇状地及び堆積面	0.0	0.0	0.0	0.0	52.4	5.2	57.8	0.0	3.7	20.9	0.0	35.3	0.0	175.3
砂礫台地	0.0	3.9	0.0	0.0	6.2	10.3	23.0	0.0	22.6	0.0	0.0	171.9	21.8	259.7
扇状地	67.3	23.8	0.0	0.0	466.1	7.6	0.0	296.5	1674.0	0.0	542.0	838.4	427.1	4342.8
開析扇状地	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	199.6	17.8	217.4
氾濫平野・後背低地	0.0	147.3	0.0	0.0	134.7	42.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	424.2	748.7
小扇状地	0.0	54.2	0.0	0.0	53.5	39.6	0.0	188.0	11.2	0.0	0.0	295.9	269.5	911.9
開析小扇状地	0.0	0.0	0.0	0.0	61.8	4.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	62.1	38.2	166.8
谷底平野	0.0	37.4	8.6	0.0	86.6	56.9	0.0	0.0	1.8	11.1	0.0	0.0	0.0	202.4
現河床	12.8	120.1	0.0	0.0	67.1	102.4	58.0	3.8	47.8	60.1	0.0	0.0	41.1	513.2
人工平坦面	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	28.9	0.0	0.0	9.7	0.0	38.6
国道	0.0	0.0	0.0	0.0	10.3	23.6	0.0	2.6	13.6	0.0	0.0	10.8	10.4	71.3
主要地方道	1.9	26.2	8.0	0.0	4.2	4.0	0.0	5.9	44.5	10.9	14.4	21.8	10.8	152.6
県道	0.0	0.0	0.0	0.0	29.4	22.7	45.5	7.8	23.1	4.7	0.0	42.4	12.2	191.7
河川・湖沼	2.5	59.8	0.0	0.0	19.3	46.3	50.2	0.5	5.0	13.8	0.0	2.3	13.0	212.7
合計	156.4	1583.6	371.1	0.8	6516.7	3575.5	12563.8	505.1	3213.3	7557.2	556.4	4256.1	1569.0	42425.0

(例-4)

土地利用現況図面積測定結果 (市町村別)

単位：ha

凡 例 名	荊崎市	市川大門	六郷町	下部町	増穂町	鯉沢町	早川町	八田村	白根町	芦安村	若草町	櫛形町	甲西町	合 計
田	3.8	131.0	7.3	0.0	268.3	68.7	4.0	43.7	88.4	9.3	132.8	121.6	314.5	1193.4
普通畑	0.0	17.8	12.1	0.0	37.4	19.8	0.0	0.0	7.0	0.0	1.6	15.0	14.9	125.6
果樹園	6.7	19.6	0.8	0.0	159.2	24.1	0.0	232.4	1031.6	0.0	133.9	513.2	260.6	2382.1
桑園	8.7	303.4	73.5	0.5	364.8	243.3	0.0	63.4	150.0	9.5	119.6	446.9	193.3	1976.9
人工針葉樹林	64.1	556.0	117.3	0.0	3479.8	1625.4	2935.7	0.0	850.8	1825.7	0.0	1700.6	214.9	13370.3
人工広葉樹林	0.0	0.9	0.0	0.0	40.8	0.0	0.0	0.0	0.0	2.9	0.0	0.0	0.0	44.6
天然針葉樹林	0.0	0.0	0.0	0.0	63.7	17.7	2172.4	0.0	25.5	1298.6	0.0	108.1	0.0	3686.0
天然広葉樹林	3.6	59.5	76.0	0.3	1271.2	1070.1	6101.7	0.0	454.1	3577.8	0.0	485.3	22.8	13122.4
竹	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
未立木地	0.0	0.0	0.0	0.0	18.1	4.7	241.3	0.0	9.8	15.2	0.0	5.6	0.0	294.7
高山植物	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0	0.0	481.7	0.0	0.0	388.0	0.0	0.0	0.0	871.7
原野	0.0	232.1	9.9	0.0	314.8	218.7	319.9	0.0	62.1	209.4	0.0	265.3	117.5	1749.7
牧草地	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
裸地・荒地	14.7	19.2	0.0	0.0	30.0	63.5	193.8	0.0	43.9	161.0	0.0	9.3	11.1	546.5
市街地	48.6	173.3	66.6	0.0	355.2	134.2	35.0	132.2	341.3	21.1	140.0	434.4	243.5	2125.4
工場	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	6.3	5.8	0.0	0.0	59.1	72.3
河川	2.2	33.3	1.4	0.0	18.9	42.5	35.8	0.0	3.0	16.2	0.0	2.4	31.6	187.3
道路	3.1	37.5	6.2	0.0	92.5	42.8	42.5	33.2	139.5	16.7	28.5	148.4	85.2	676.1
合計	156.4	1583.6	371.1	0.8	6516.7	3575.5	12563.8	505.1	3213.3	7557.2	556.4	4256.1	1569.0	42425.0

〔例-5〕

単位：ha

凡 例 名	韭崎市	市 川 大町町	六郷町	下部町	増穂町	鯉沢町	早川町	八田村	白根町	芦安村	若草町	榑形町	甲西町	合 計
国立公園 (特別地域)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2822.2	0.0	0.0	3488.6	0.0	0.0	0.0	6310.8
果 有 林	0.0	4.4	0.0	0.0	3255.5	1641.7	7201.6	0.0	788.4	7107.9	0.0	1722.3	111.4	21833.2
保 安 林 (水源かん養 保安林)	0.0	165.7	7.2	0.0	2982.5	1387.4	8905.9	0.0	778.9	6987.1	0.0	1575.6	111.4	22901.7
財産区有林	0.0	19.0	6.5	0.0	1.7	64.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	91.9
社 寺 林	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	15.7	0.0	0.0	0.0	5.9	0.0	0.0	0.0	21.6
保 安 林 (土砂流出 防備保安林)	0.0	16.0	12.6	2.5	77.3	40.0	295.2	0.0	21.6	29.7	0.0	25.6	3.7	524.2

1993年3月 印刷発行

土地分類基本調査

大河原・鯉沢

編集発行 山梨県農務部農村整備課
山梨県甲府市丸の内1-6-1

印刷 内外地凶株式会社
東京都千代田区神田小川町3-22